様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５６０

研究課題名（和文）音義派言語論の日本語学史的研究

研究課題名（英文）A historical study on Japanese Nativists who believed in sound symbolism

研究代表者
山東　功（SANTO, ISAO）

大阪府立大学・21世紀科学研究機構・教授

研究者番号：１０３２６２４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幕末期の、特に五十音図を絶対視し、そこから活用論や語源論を展開させた「音義派」と呼ばれる言語論を展開した国学者の言語研究について、研究が進んでいる維新史学や神道史学の研究を視野に含みつつ、言語研究の分野から精査を行った。具体的には、平田篤胤や富樫広蔭、高橋残夢の言語研究などを中心として活用研究や音義説、神代文字論などを日本語学史的に精査し、その研究史的意味について検討を試みた。

研究成果の概要（英文）：In this research, we investigated a historical study on Kokugaku-sha (Japanese Nativists) who believed in Ongi-setsu (sound symbolism). And we reseached some studies on Katsuyou (grammatical conjugation), Ongi-setsu (sound symbolism), and Jindai-Moji (ancient Japanese characters) of Hirata Atsutane, Togashi Hirokage, and Takahashi Zanmu, in particular.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本語学、日本語学史

キーワード：日本語学史　幕末国学　音義派

１．研究開始当初の背景

富士谷成章や本居宣長、本居春庭といった近世国学者の言語研究については、明治以降の国語学史の研究分野において、すでに多くの研究がなされている。また、近年では国民国家形成期の学知を問うという観点から、明治以降の近代国語学成立時期に関する言語研究についても言及がなされるようになってきた。近世国学の言語研究については、山東功（2003）「語の断続」（『文莫』25、鈴木朗学会）において鈴木朗の活語研究を、また明治以降の国語学については、すでに山東功（2002）『明治前期日本文典の研究』（和泉書院）や文化庁編（2005）『国語施策百年史』（ぎょうせい）などで近代国語学成立史を検討している。

しかしながら、近世国学の成果の継承にばかり目がいく結果、どのような研究が捨象され、また非学術的と認定されていったのかについて検討したものは、ほとんど見受けられないように思われる。現代でも一般社会で時折主張される恣意的な語源解釈についても、それらの解釈が幕末期音義派国学者の言語研究の中に見出されることは、あまり言及されていない。

すなわち、近世国学と明治以降とを繋ぐ時期の研究については、未だ十分に解明されていない実態が存在すると言えるのである。具体的には、平田篤胤以降、幕末期に活躍した富樫広蔭、鈴木重胤、平田鉄胤、堀秀成といった音義言霊派国学者の言語研究などがこれにあたる。その後の近代西洋化の中で埋没した、幕末期国学者の言語研究については、その言語研究史的意味を十分に検討する必要があると言えるのである。

２．研究の目的

そこで幕末期の、特に五十音図を絶対視し、そこから活用論や語源論を展開させた「音義派」と呼ばれる言語論を展開した国学者の言語研究について、研究が進んでいる維新史学や神道史学の研究を視野に含みつつ、言語研究の分野から精査するといった、本格的な検討が必要であると思われる。具体的には、これまで神道史学的研究との交渉があまり見受けられなかった平田篤胤の言語研究や、逆に神道史学ではあまり言及されなかった富樫広蔭や高橋残夢の言語研究などを中心として活用研究や音義説、神代文字論などを日本語学史的に精査し、その研究史的意味について検討を試みた。

また、文法研究の分野ではその存在が知られているものの、『国学者伝記集成』や『和学者総覧』においても、ほとんど見るべき記述のない、伊勢周辺の地方知識人として活躍した国学者（「桑名皇学会」門人など）に関して、年譜考証ならびに国学史上の影響関係について考察を行った。

さらに、大国隆正や鶴峯戊申といった幕末期の国学者が常に蘭学を意識していた点を重視し、を分析することで、ほとんど顧みられることのなかった幕末期音義派国学者の言語研究の研究史的位置付けが可能となったものと思われる。

日本語研究の歴史的伝統と、その成果の正確な継承は、研究者個人の問題を超えた歴史的使命として考えられる。しかし今日散見される、最初に結論ありきの評論的言語論では、結局は実証的研究を無視している以上、議論の説得性に欠けるきらいがある。例えば、幕末期音義派国学者に関しては富樫広蔭や鈴木重胤らの名がよく挙がるものの、それは文法研究においてのみの評価であり、他の国学者の言語研究とはいかなる関係にあったのかについては、意外なほど詳らかになっていない。ましてや蘭学に関しても造詣の深かった鶴峯戊申などに至っては『語学全書』という書名のみが独り歩きして、神代文字論や音義説などを含んだ学説の総体について、十分実証的に言及されているとは言い難い現状である。また、国学関係文献所蔵機関として名高い國學院大学、皇學館大学、神宮文庫でさえ、活用論や仮名遣書と比して、音義言霊論関係書については十分な整理があまりなされておらず、おそらくは把握できる範囲でも数十編は存在すると思われる音義言霊論書の全貌に関する言語研究史的解明は必須であると思われる。

その上、音義言霊論関係書は他の近世刊本・写本などと比して所蔵機関でも余り重要視されていなかったことから、中には史料の劣化がはなはだしいものも存在する。平田篤胤や大国隆正らの著述については、ようやく一部の音義言霊論書が全集等により復刻されつつあるものの、言語研究の全体像からすれば極めて僅かであり、緊急性は絶対である。本研究は、こうした喫緊性の問題をふまえつつ、主要な幕末期音義派国学者に関する文献調査を行うとともに、その具体的な実態を広く日本語学史の観点から全体を定置するという、いわば言語思想史的方法論によって考察しようとしたものである。

本研究は幕末期音義派国学者の著述に関する文献学的実証研究と、国学の実相という維新史・神道史的研究とを、近代国語学成立の前哨という言語思想史的見地から統合する、極めて学際的かつインターフェイスな日本語学史的研究と位置付けられる。

３．研究の方法

本研究では以下の３点について、経年的かつ継続的に実施した。

・平田派国学者（平田篤胤門人）の言語研究に関する文献学的史料調査

・地方（伊勢等）・江戸派国学者の言語研究に関する文献学的史料調査

・幕末期音義派国学者の日本語学史的検討

具体的には、江戸派国学者の音義派言語研究に関する文献学的史料調査として、近代学知としての「国語学」の成立に至るまでに、

多くの知見を提示しつつも、そのほとんどが顧みられなかった音義派国学者について、特に橘守部や林圀雄らの言霊論や、富樫広蔭、堀秀成らの語源的音義研究等について学説内容を精査し、それらが帝国大学における「国語学」「国文学」の設立に寄与した物集高見、本居豊穎、小中村義象、木村正辞といった国学者らの言語研究とどのような形で対峙していたのかという点について分析を試みると共に、従来看過されていた蘭学との関連性について考察を行った。

また、当時の神秩序観や言語観との関係や、国学者の言語研究が果たした役割について、言語思想史的知見を加えながら、学説史的に検討を試みる。具体的には、音義派国学者の言説が後世に与えた影響や反目、さらには明治以降における教育機関での扱い方等について、従来の国学研究史の枠組みにとらわれない形によって分析を試みた。

４．研究成果

音義説について俯瞰してみると、以下のようにまとめられる。

言霊派　賀茂真淵
　　「語意」派　林圀雄
　　倒語説　富士谷御杖
　　音義言霊派　中村孝道、高橋残夢
音義派　平田篤胤
　　一行一義　平田篤胤、鈴木重胤
　　一音一義　橘守部、富樫広蔭、堀秀成
神代文字論　諦忍、平田篤胤、鶴峯戊申

以上の音義説について、例えば、高橋残夢の音義説は、中村孝道『言霊或問』（天保 5（1834）年成）や『言霊聞書』（早大本、扉に「言霊真冽鏡」）の影響下にあるもので、平田派の五十音図とは異なり七十五音図を重視する。なお言霊学への展開としては、中村孝道→望月幸智→五十嵐篤好（五十嵐篤雄『言霊真澄鏡』）、大石凝真素美と連なっていき、復古神道（古神道）の流れへと通じていくことになる。当然ながら、ここに平田派における「アウトロー的学問の典型的手口」（釘貫亨氏）とでも称すべき在り方との共通性を見出すことも可能であり、それは日本語学史のみならず、日本思想史的に見ても大きな意味を持つ。

また、音義派に関しては、国学の継承性という点にも注目すべきである。国学の継承性について大いに興味と関心を払ったのは、平田篤胤に連なる一派と言えるからである。このことに対して、没後門人としての篤胤という出自の問題が関係しているとまでは断言できないが、少なくとも国学において重視されるべき側面について、学統といった正当性の言説を展開していった点については注目してよいものと思われる。

学統観に関しては、幕末から維新前後においては、歌学的学統観（契沖・真淵・宣長）に対して、神学的学統観（春満・真淵・宣長）が国学の主たる規定となる。結果として、国学における最も重要な関心事が神学との調和に向けられることになり、その代表的なものが「音義言霊学派」（時枝誠記『国語学史』における術語）として現れる。このことは狂信的とも称される平田篤胤の扱いとも関係してくるが、明治以降は取捨選択がなされた上での評価となり、総体として把握されることは少なかった。なお、篤胤『古史本辞経亦云五十音義訣』「古言学由来　第十」は、国学史の記述であるとともに、一種の「国語学史」的様相を示している点に注意すべきであろう。

以上のことから、音義派言語論については、平田派国学の学統観である神道的国学観との関係において、思想史的に検討すべきことの重要性が示された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 山東　功、国語施策と文法教育、言語文化学研究（日本語日本文学編）、9、1-15、2014、査読無
② 山東　功、石門心学と不生禅、言語文化学研究（日本語日本文学編）、8、9-26、2013、査読無
③ 山東　功、「注」についての注釈、日本近代文学（日本近代文学会）、88、158-163、2013、査読有
④ 山東　功、歴史的仮名遣いと現代仮名遣い、日本語学、31-2、66-74、2012、査読無
⑤ 山東　功、大槻以後―学校国文法成立史研究―、言語文化学研究（日本語日本文学編）、7、1-20、2012、査読無
⑥ 山東　功、時枝誠記『国語学史』、日本語学、30-8、76-82、2011、査読無

〔学会発表〕（計 3 件）

① 山東　功、近代国民国家の形成と言語計画、シンポジウム、多言語主義と歴史言語学、2014.3.11、京都大学
② 山東　功、文法教育／研究の近・現代、ワークショップ、日本語学会 2011 年度秋季大会、2011.10.22、高知大学
③ 山東　功、大槻以後、第 69 回中部日本・日本語学研究会(招待講演)、2011.7.9、刈谷市産業会館

〔図書〕（計 2 件）

① 藤田保幸編、山東功他、形式語研究論集、和泉書院、2013、（執筆箇所「学校国文法と形式語」319-338）
② 山東　功、日本語の観察者たち―宣教師からお雇い外国人まで、岩波書店、2013、

総頁 201

〔その他〕

① 山東　功、〈書評〉三ツ井崇『朝鮮植民地支配と言語』、日本語の研究、9-1、42-47、2013、査読有

６．研究組織

(1)研究代表者

山東　功（SANTO ISAO）
大阪府立大学・21 世紀科学研究機構・教授
研究者番号：10326241